

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 1日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520677

研究課題名（和文） 秋田藩領北部諸鉱山の研究

研究課題名（英文） A Study of Northern Mines in Early Modern Akita Clan

研究代表者

萩 慎一郎 (OGI SHINICHIRO)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：60143070

研究成果の概要（和文）：秋田藩領には阿仁銅山をはじめ院内銀山など、近世日本を代表する鉱山があった。本研究では、秋田藩領北部の阿仁銅山をはじめ、八森銀山、大葛金山などに関する基本史料を各所蔵機関等において調査し、写真撮影で収集した史料をデジタル化と出力化して整理した。本格的な研究がなかった八森銀山研究に着手し成果があった。また個別鉱山研究に加えて鉱山相互の関係や交流、鉱夫の葬送など鉱山社会史研究の面でも多くの知見を得た。

研究成果の概要（英文）：In Akita Clan there were several representative mines of early modern period of Japan: Ani copper mine, Innai silver mine and others. In addition to case studies of Ani copper mine, Hachimori silver mine and Okuzo gold mine, this paper studies mutual relations and interactions among mines.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：近世史、鉱山史、秋田藩、八森銀山、阿仁銅山、大葛金山

1. 研究開始当初の背景

（1）これまで秋田藩領鉱山の研究では、南部に位置する院内銀山、北部に位置する大葛金山の研究を手がけた。しかし近世日本の銅山研究でも重要な鉱山である阿仁銅山については、先行研究があるものの、未だ手がけたことがなかった。本研究では、阿仁銅山研究の手がかりを得ることを課題とした。このため、阿仁銅山関係史料の収集と整理を進めることとした。

（2）西日本と東日本との比較研究の目的をもっていた。西日本の鉱山については対馬藩領鉱山や薩摩藩領鉱山の研究を手がけており、また生野銀山についても研究を進めている。東北地方では近世後期に鉱夫集団が成立し活発に活動していた。鉱夫の社会集団や活動を軸に東日本と西日本の比較研究への見通しを得ることができかどうか、「友子」関係史料の新たな発掘も期するものがある。

2. 研究の目的

(1) 秋田藩領北部には、阿仁銅山・大葛金山・八森銀山・太良鉛山などの近世日本の有力鉱山が稼行していた。本研究では、これらの個別鉱山研究を深化させるとともに、これまで研究が皆無であった八森銀山などは、その歴史を明らかにする。

(2) また、秋田藩領北部諸鉱山では相互に関係する歴史を形成しており、その動向を関連付けて研究する。たとえば労働力の移動では、これらの諸鉱山間だけでなく、藩境の諸鉱山間でもみられる。また大葛金山を経営した荒谷家では、同時に八森銀山を経営する動向もみせている。さらに近世後期に阿仁銅山の産銅は、太良鉛山産出の鉛を使って籠山精錬所で銀銅分離が行われた。諸鉱山の動向と関連付けながら、研究を進める。

3. 研究の方法

(1) 基本となる史料を収集し、これをデジタル化して整理した。デジタル化と整理した史料は、①那波家文書、②今林家文書、③小貫家文書、④荒谷寿衛家文書、⑤九州大学工学部旧蔵(九州大学総合研究博物館現蔵) 鉱山関係史料で、これまで写真撮影したものをデジタル化し、新たにデジタルカメラで撮影したものを加えてA4版用紙に出力して整理した。いずれも秋田藩領鉱山および同藩領北部諸鉱山に関する基本史料であり、この史料を基に研究成果を発表し、今後も追加する予定である。

(2) 整理した史料を分析し、関係史資料と照合しながら歴史像を探り、問題に迫るオーソドックスな研究手法をとった。関係資料としては絵図類も活用した。鉱山絵図では、国文学研究史資料館所蔵の荒谷家文書が豊富であり、デジタルカメラによって撮影したものを、学会発表などで利用した。

4. 研究成果

本研究課題で得られた知見の一部については、『日本史リブレット 近世鉱山をささえた人びと』に反映し盛り込んでいる。

さらに、本研究の主な成果で、既に発表したもの(学会発表を含む)では八森銀山の研究がある。八森銀山の研究では、以下の知見を得ることができた。

(1) 八森銀山研究の課題

出羽国秋田藩領の八森銀山(現、秋田県八峰町〔旧八森町〕)は、秋田藩の鉱山行政に関わった梅津政景の日記(以下、『政景日記』)には寛永4(1627)年以降に同山の記述がみられるようになる。寛永年間に開発が進んだことが推定される。また近世後期の編纂書である「秋田領内諸金山箇年数帳」(「鉱山紀年録」、大正版『秋田県史』第三冊所収)に

みられる佐竹入封(慶長7<1602>)以前の開発とされる「八森銀山」は、政景日記にみられる「水沢銀山」(現、秋田県八峰町〔旧峰浜村〕)にも比定されている(山口啓二1960)。

近世後期に「八森銀山」を描いた絵図(「山本郡八森古銀山図」等)には、「八森銀山町」の所在する小入川の上流地域一帯から真瀬川上流地域一帯にかけての区域に鉱脈や坑口等が描かれており、この区域が八森銀山と捉えられている。なお、近代に開発された椿鉱山(のち八盛鉱山、発盛鉱業所)は、真瀬川河口の茂浦よりさらに南に位置する海岸部に所在し、近世の八森銀山とは区域も異にする。

これまで、近世八森銀山に関する本格的な研究はなく、その歴史は必ずしも明らかではない。本報告では、近世(江戸時代)の八森銀山に関する基本史料の紹介とその歴史に関する概要を紹介する。

(2) 寛永年間の八森銀山～『政景日記』のなかの八森銀山

『政景日記』には、寛永4(1627)年8月24日の条において、八森小入川の新聞歩の間吹の結果をうけて、政景自身が八森へ赴き、8月28日には諸間歩を見分している。当時の八森銀山には、東平に22、南平1、西平1の計24の銀山間歩数、鉛山間歩9があったことを記す。それ以前から稼行が成され、鉛を採掘する間歩もあった。同年9月2日には八森銀山奉行2名が着任、直山として支配されている。山師41人に屋敷地を渡しており、山師の来山も増えてきたのであろう。

翌5年5月23日の条では、この日八森銀山に赴いた政景は、当時の家数が70軒余、人口700～800人で、山内諸方から床白や唐白の音が聞こえてくることを記している。山況は上向きになっていたのであろう。しかし、前年同様に一年のうちでも山況の好悪の振幅が大きかった模様である。

寛永6年は好況であったようで、「八森銀山能左ニ申来候」(6月11日)、八森銀山奉行の報告では、人口は3000人ほどで、6月1日から13日までの払い米・鉛、諸役運上銀高は5月一ヶ月分に相当するペースであることを記している(6月15日の条)。なお、参考までにこの年6月の米相場は、能代町(米代川河口の湊町)において平均すると米

1石が銀15匁5分（銀1匁で約米6升45）であり、八森銀山の払い米値段は相場の約1.5倍以上であったことになる。

寛永6年の『政景日記』八森銀山関係の興味深い記述として、当時の山師の性格に関する一事例が注目される。伊勢国津の出身である伊勢の長三郎は仙北郡舟岡村（現、秋田県大仙市）にある一里塚付近で腹を切って自殺する（6月27日の条）。彼は山師であり、延沢銀山（現、山形県尾花沢市）で頭を打ち、これがため「ちこくち」で「細々機（気）違」となった。その後7～8年間院内銀山に居住していたが、八森銀山の盛況を聞いて同地へ赴くも、実際は噂ほどでなく、院内銀山へ戻る途中での自殺であった。長三郎には小者の従者（彼も伊勢国津の出身）がいて、この日は先発して境村（現、大仙市協和境）にて宿を手配して待っていたが、長三郎が到着しなかったので、翌朝に引き返して、主人の自殺を知ることになる。彼の山師長三郎は、①延沢銀山から院内銀山へ移住、さらに八森銀山へ赴くなど、各鉾山の盛況の情報に接すると移動するなど、遍歴している。②彼は「大小」（刀・脇差し）を差して移動するなど、またその自殺も切腹する等武士的要素を色濃く残す人物を想像させる。③彼は小者を従えて移動しているが、従者も伊勢国津の出身で同郷であった。商人的性格をもつことも推定させる。かつて、院内銀山を事例に近世初期の鉾山町住民の性格を分析した山口啓二氏は、その階層の一つとして「山師・町人層」を析出し、彼らは「兵農分離の過程で、全国的な領主的商品流通に商業資本として投じた者たちである」と評価した（山口啓二1959）。武士的心性と商人的性格を合わせもち、しかも鉾業を専業として鉾山社会に定着した階層であったことを推定させる。

さて、寛永7年の『政景日記』の八森関係は記載が少ないものの、寛永8年および9年に関しては、山況が一定判明する記載がある。そのなかで注目される諸点を掲げておく。

第一は、八森銀山の幕府運上銀高の寛永7年分銀21貫724匁7分、寛永8年分銀24貫871匁8厘の記載である。秋田藩領銀山の幕府運上高は、寛永7年分が院内銀山銀58貫584匁余、翌8年分が院内銀山50貫137匁であり、当時領内銀山では第二の地位にあった。ただし、院内銀山は元和年間（1615-

1623）に100貫目以上、200貫目に及ぶ運上高の年もあるので、院内とは大きな開きがあり、この間に第二の地位にあったのは荒川銀山で、元和4（1618）年には24貫目余の運上高があった。

第二は、鉾山の生産動向や人口規模を示し、藩の財政にも関わる御鉛および御米の払い高である。寛永7年分については記載があり、御鉛払い代銀は96貫199匁9分、御米払い代銀は61貫466匁3分3厘とある。鉛は2万0329貫095匁が「本メ分」、470貫975匁が「残而過」分、鉛座の残鉛8244貫目の引継ぎ分があったようである。この年の一年間の鉛消費量は判然としないが、1万2000貫目程は消費されていたことになる。

（3）近世中期の八森銀山～『八森銀山記全』とその史料批判

秋田県立公文書館の高橋真人家文書には、秋田藩惣山下代を代々勤めた杉原氏の文書が収められている。その文書のなかに、表紙に「八森銀山記 全」と書かれた冊子がある。その冒頭には、この史料の来歴について以下のように記している。すなわち①阿仁銅山の経営にも関与していた柏木新太郎が八森銀山経営に携わった時期（安永年間）に「銀山記」から入用の所を抜き書きし、②この抜き書きを、八森銀山の林徳寺住職が借りて写し取った。③さらに、天明8（1788）年に伊勢清左衛門が、この林徳寺の写本から、入用のところを写し取ったものとする。ただし、以上のような来歴をもつ本書を、さら杉原行天が写本として持つに至った経緯は、本書の末尾に自身で以下のように書き加えている。この箇所を要約すると次のようになる。「この「書留」は「八盛銀山之亀鑑」であり、（八森銀山内で）秘蔵されていた。いつ頃か不明であるが、銀山麓村の小入川村の百姓何某が所蔵し、銀山の山内者には見せないことにしていた。文政3（1820）年に銅山方から郡方を通じて、村方（小入川村）よりこの文書を取り寄せ、写本を2部作成し、一部は銅山方、一部は八森銀山に置くことにした。自分（杉原行天）は銅山方の写本を写したのであるが、銅山方保管の写本にはもともと書写した者の誤りで末尾に脱漏があったので、去年（文政4年）3月に八森銀山を訪ねた際に、もう一部の八森銀山に置かれている写本で末尾を補った」。

『八森銀山記 全』の来歴について紹介したのは、これと内容が重複する所が多い『八森古銀山覚』とする文書が地元には伝えられていたからである。『八森古銀山覚』については、1970年10月に当時八森町立岩館小学校々長であった佐々木正雄氏によって紹介され（佐々木正雄 1970）、後年その全文が（一部は書き下し文に直して）同氏によって紹介された（佐々木正雄 1986）。地域の歴史、八森銀山の歴史を解明し、世に伝えようとした佐々木氏の熱意がみてとれる。ただし、同史料について『八森古銀山覚』は、山先米山家七代米山仁左衛門が、火災で失くした古記録（八森銀山記）を、文政四年になって思い出し、書き残した八森銀山の覚書である（中略）『肥前長崎出生米山仁左衛門文政四年庚寅正月吉日是書之』と、『覚』の裏表紙に記入している。「山先米山家では、古銀山の記録、『八森銀山記』が焼出したので、文政四年に七代目の仁左衛門が、『古銀山覚』を書き留めたと言っている。」（佐々木「八森銀山資料について」1986）と理解されているのは、同史料の価値をいささか低めることになるのではないだろうか。火災によって焼出した古記録を思い出して書いたのでは、その史料内容の信頼性、信憑性に疑義が生じる。仁左衛門は文政4（1821）年にこの史料を写本として書き写したのではないだろうか。すなわち、文政3年に銅山方で2部写本にして、その一部を八森銀山に置いたのを、翌年米山仁左衛門が写した可能性が高いのである。

『八森銀山記 全』の所収文書には慶安4（1651）年から明和2（1765）年の支配人加々美半兵衛時代のもものが収録されている。また、その後の八森銀山に関する記載では安永2（1773）年までである。ただし、後日の補筆のところでは、安永4年に柏木新太郎等が支配人となった関係、この年の一日平均の出銀高、「当申年」（安永5（1776）年）の一日平均の出銀高が記載されている。柏木新太郎はこれまでの記録を転写して、さらにその当時に関わる記録を書き加えて成立したものと考えられる。

『八森銀山記 全』は八森銀山の17世紀後半～18世紀後半の歴史、とりわけ最上屋市右衛門が八森銀山経営に関わった享保3（1718）年から宝暦元（1751）年を中心に、18世紀前半の八森銀山の歴史を解明できる

基本史料に位置し、貴重である。

同文書による研究は今後の課題であるが、17世紀半ば～18世紀後半の八森銀山は、請山や直山を繰りかえしながら、断続的に富鉱脈を発見し、産銀も一定水準を保持したことが推定される。壺貫五百目平の姥鋪、掃鋪、筒鋪、九蔵鋪の三十三口等で「直り」に当たり湧水対策として大切水抜き普請なども着手された。延享4（1747）年には底部平の七番鋪にて富鉱脈に当たり、「売山」（掘り分け山）として支配されている（荻慎一郎 2000）。年間産銀高の一端では、宝暦8（1758）年が69貫目余、同9年64貫目余、同10年48貫目余、同11年52貫目余、同12年53貫目余、同13年43貫目余などが分かる。

杉原行天は鉱業関係の史料・書誌の編纂を進めた人物であるが、当該期の鉱業をめぐる文化状況の動向としても注目される。

（4）文化年間の再開発～荒谷家文書にみる八森銀山～

文化13（1813）年12月、大葛金山支配人の荒谷忠兵衛が藩に提出した願書（荒谷家文書128号、国文学研究資料館蔵）によれば、文化10年春から大坂屋彦兵衛と荒谷忠兵衛の両人が共同で山師として八森銀山を受山として経営した。当時の八森銀山は「数十年相捨」てられているので、「何卒御益筋ニ相成候御山ニ再興仕度」との企図であった。資金面は主に大坂屋彦兵衛が担い、荒谷忠兵衛が現地で指揮をとったものと思われる。

しかし、荒谷忠兵衛は父親（忠右衛門）の病気等で文化12年7月から大葛金山へ帰宅、文化13年2月に父の死亡などから、八森へ赴くことも叶わず、八森銀山の支配・経営からの撤収を訴願したのであった。

この荒谷忠兵衛による八森銀山の再開発は、近世において廃山同然となっていた鉱山の再開発のありかたを知る事例を提供するので、その観点から以下において史料に基づく紹介をする。

文化10年4月に荒谷忠兵衛は再開発のための普請に関する見積もりを作成し、藩へ提出した。坑内普請は①「取明本番普請」（本番取明普請）、②「本番切山普請」、③「買師小普請」の3つの見積帳（荒谷家文書126、127、125号）が作成されており、普請は、その普請主体から「本番」（鉱山経営側）と「買師」（金名子）の2形態であり、普請目的か

ら「取明」と「切山」の2形態であったことが判明する。

第二に、本番による取明普請および切山普請は、ともに「掃舗」「常吹舗」「西平大切舗」の3坑を記載しており、この時の再開発がこの3坑で目論まれたことが判明する。また普請見積り帳の分析から、取明普請は、留大工の下に掘子と矢留木伐りが働いており、掘削を伴わない坑道の再構築（修理等）のための普請である。切山普請は探鉱や水抜き等の掘削普請であり、一日の進捗は3寸5分～6寸位の掘削延長程度にとどまる。まずは坑道再構築のための普請から着手されたのである。

本番（鉱山経営側）が編成する普請とは別に、「買師」（金名子）が単独または共同で取明と切山の普請を実施することが企画された。

実際の本番普請と買師小普請の進捗状況は如何であったろうか。普請着手5ヶ月を経過した文化10年9月の報告（荒谷家文書124号）からみておこう。

本番普請については、掃舗や西平大切舗取明普請を重点に行われていたようである。しかし、休業中の普請も多い。これに対して、買師組の普請は切山普請を中心に進められ、一部では出鉱もみた。

買師の普請は探鉱を基本として、それまで稼行していた箇所を中心に組まれたものであろう。金名子が自力で探鉱普請をすることは困難となり、組を成して共同普請、共同採掘する形態が多くなっていた。

文化10年5月から7月の3カ月の普請で、実際に要した現地の収支・経費に関する帳簿からもこの点を裏付けることができる。すなわち、この間の支出は①「買士（師）普請」の3ヶ月間の「入方」、②「本番舗岡普請」の同前、③「台所」（鉱山事務所）の同前、④竹・諸道具・留木ほか買い入れ代等から構成され、その内訳は①116貫文余、②218貫文余、③88貫文余、④65貫目文余である。つまり、買師普請と本番普請との経費比較から買師普請経費が占める割合も相対的に低くないのである（約35%）。

本番普請の経費（218貫文余）の9割近く（87%）を占めるのは、留大工・掘子等への「給代」であり、延1746人に対して190貫文余を計上している。この「給代」以外に米17石余の経費42貫文余、味噌6貫文余の食

糧が別途に計上されている。米代については「留大工・掘子扶持米并禁宿使番扶持、浪人へ呉」とあり、「浪人」＝渡り金掘り等の来山・宿泊時の扶持米支給に関するものも計上されているのが注目される。再開発の情報を聞いて渡り金掘りの来山もあったことであろう。

（5）幕末の八森銀山～那波家文書にみる八森銀山

秋田藩の「御山師」であった那波家の文書（那波家文書、秋田市立図書館明德館蔵）には、輪番で担当した年の直山への資金供給や生産された金銀銅鉛の受け払いなどの鉱業関係史料がある（荻1987）。ここでは、弘化2（1845）年の同藩の銀生産高と主に金銀銅の製錬用に供給された鉛生産高について紹介する。あわせて幕末の八森銀山の銀生産の一端をみておこう。

『灰吹金銀銅鉛請払纏御勘定御末書帳』（弘化2年12月、那波家文書4181-10号）によれば、各鉱山で生産された銀は「灰吹銀」と「吹抜上銀」に分けて受け払いが算定されている。まず、「灰吹銀請払」については、この年に加護山精錬所から納入された銀162貫199匁が受け払い総額163貫目余の大部分を占める。この加護山から送られた銀には、八森銀山産銀分30貫909匁、真木沢銅山同分3貫607匁、向銀山同分746匁が含まれている。

「吹抜上銀」の457貫目の受け払いの大部分は、この年の院内産銀454貫500匁であった。院内銀山の吹抜上銀は、同山産銀から金銀分離による精錬工程を経て精製された銀であった。これらの灰吹銀・吹抜上銀は藩の御金蔵へ納められ、その後に幕府銀座へ買い上げられた（引き替え）のである。

鉛の受け払いで注目されるのは、加護山吹所より受け取った（御山師の下に送られた）鉛が9827貫目で、他に金掘沢鉛山・中野沢山・冷水山・比立内山・開岡山の各「小山」＝小規模生産の鉛山の分710貫目があった。加護山より納入された鉛は、主要鉛山から一旦は（直接に）加護山へ納入されるシステムがあったのであろう。上記「小山」の鉛も払いの項目では「御山師」から加護山へ渡されている。

この年に院内銀山へ仕送られた（御払い）の鉛は8800貫目、八森銀山へは同444貫目

余、向銀山へは同 113 貫目余、他に兵具蔵へ納入分が 660 貫目、「地御払」いのが 115 貫目余であった。

以上から、鉛の流通は、銅製錬（精製を含めて）のために、まず加護山吹所がその要に位置し、領内鉛山から加護山へ送られて銅製錬のための鉛を確保し、加護山から御山師（城下久保田）を経て領内主要銀山へのお払い鉛として送られることも推測できる一つである。尚、実際には八森銀山や向銀山は直接に加護山から送られ、帳簿上の経由である可能性が高い。院内銀山へは 1 ヶ月に 4～5 回、一回 10 箇または 20 箇（1 箇は 16 貫目入）の鉛が送られていた。当該期に領外からの鉛の移入の是非を含めて、領内鉛の生産・流通はなお検討する課題が多い。

（6）八森銀山研究の意義と研究成果

八森銀山は、17 世紀初頭の開発、その後の産銀高の減少、水抜きと探鉱普請による生産維持の試み、廢山同然の状況での再開発の試みなど、近世鉱山の辿った一般的な歴史をみることができる。しかし、秋田藩領のなかでは中規模銀山として、盛衰はみられるものの一貫して存続稼行し、一定程度の生産高を保持した点では、大葛金山と同様に注目される。

本報告では、八森銀山に関する管見の限りでの基本史料の紹介と各時代の残存史料から注目される諸点を不十分ながらみようとしました。その研究は緒についたばかりで課題も多いが、領内鉱山の関係性、たとえば拠点鉱山・精錬所と他の中小鉱山との、鉱山支配や製錬用鉛の流通をめぐる関係などにも留意すれば、研究上の新たな視点を提示できる。

〔引用文献〕

山口啓二「秋田藩初期の金銀山」（初出 1960）、のち同著『幕藩制成立史の研究』（1974、校倉書房）所収。

山口啓二「近世初期の秋田藩における鉱山町」（初出 1959）、のち同前著（1974）に所収。

佐々木正雄編『八森古銀山考』（1970、八森町）

佐々木正雄編『八森 郷土誌資料』25号（1986、八森町文化財保護協会・八森町教育委員会協会）

荻慎一郎「金掘り」（塚田孝編『近世の身分的周縁 3 職人・親方・仲間』2000、吉川弘文館）

荻慎一郎「近世後期における鉱山経営—秋田藩領大葛金山の経営」（初出 1985～87）、のち同著『近世鉱山社会史の研究』（1996、思文閣出版）所収。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

荻慎一郎、秋田藩領八森銀山の研究、資源・素材 2012 秋季大会企画発表講演資料【A12 秋田県の鉱山に見る歴史】、査読無、2012、pp. 9[~]12

〔学会発表〕（計 3 件）

①荻慎一郎、秋田藩領八森銀山の研究、資源・素材学会、2012 年 9 月 13 日、秋田大学（秋田市）

②荻慎一郎、1910 年代の宮崎県沖の珊瑚漁と高知県漁民の出漁、東北大学国史談話会、2011 年 6 月 11 日、東北大学（仙台市）

③荻慎一郎、院内銀山研究の意義—近世鉱山社会史研究の立場から—、日本鉱業史研究会、2010 年 10 月 16 日、秋田県湯沢市

〔図書〕（計 4 件）

①荻慎一郎（単著）、山川出版社、日本史リブレット近世鉱山をささえた人びと、2012、全 106 頁

②荻慎一郎、他、リーブル出版、臨海地域における戦争・交流・海洋政策、2011、執筆「近代における宮崎県沖合の珊瑚漁と高知県漁民の出漁」pp. 223[~]277

③荻慎一郎、他、吉川弘文館、江戸の人と身分 5 覚醒する地域意識、2010、執筆「浦の地域社会像—近世社会と浦—」pp. 169[~]198

④荻慎一郎、他、東海大学出版会、A Biohistory of Precious Corals、2010、執筆第 9 章・10 章 pp. 163[~]249

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等は無し。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻 慎一郎 (OGI SHINICHIRO)

高知大学教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：60143070

(2) 研究分担者 0 人

(3) 連携研究者 0 人